

かくして『うさぎ』は、やって来た

衛星軌道上に位置するギャンブル都市、ニュー・マカオ。ここは、その名の通り、ありとあらゆるギャンブルとゲームを集めた街である。

カードとルーレットをメインとするクラシカル・カジノ。スロットとビンゴで気軽に遊べるアメリカン・カジノ。花札やサイコロ賭博にはキモノが必須アイテム、賭場。女性連れにウケのいいショット・バー。

中国語が話せなくてもプレイできる麻雀荘。

もちろん、庶民の娯楽、パチンコ。

どのような趣味の人にも対応できるだけのものが揃っている。

そして、もう一つ、この街の特徴は「カジノに入るためには、その場にふさわしい服装が要求される、ということ」で、コスチュームのレンタル店も軒を連ねている。

日本州警のバーリーは、休暇を利用して、ここニュー・マカオにやってきた。

彼には、博才がある、というのは言いすぎだとしても、ギャンブル運に恵まれているのは間違いない。

ほんの二時間ほど前、バーリーは、タキシード姿で葉巻をくゆらしながらポーカーにトライし、見事ジャックポットを射止めた。

それに先立つこと三時間、彼はキモノの裾をからげたうえに立て膝で、チンチロリンをやっていた。ここでは、さして勝ちもしなかったが、負けもしなかった。

(そろそろ、いつもの服装に着替えてパチンコでもするか) 着慣れない服のせいで凝ってしまった肩をほぐしながら、

軍艦マーチの流れる店内へとはいった。

釘の状態をにらみながら台を選ぶ。

表情は真剣そのものだ。

この真剣さがツキを呼ぶのかもしれない。

選んだ台に向かったバーリーは、まばたきの回数が減少している。それほど一生懸命に玉の行方を見つめている。

(入れ！入れ！)

心の中で玉を応援するーというよりは(入れ！)と念じている。

その甲斐あつてか、七台を打ち止めにした。

(これだけあれば、さぞかし、いい景品がもらえるだろう)

ホクホクしながら大量の玉を運んだバーリーの前に差し出されたのは『うさぎの縫いぐるみ』だった。

たかが縫いぐるみとバカにするなかれ。それは、本物のウサギの毛皮を縫い合わせたもので、中に詰めてあるのも、これまた100パーセント純粹ウールである。

毛皮もウールも合成ものがほとんどのこの時代、天然ものの価値は高い。充分に7台打ち止めに見合うだけの品である。

だが――

(あああ：なんだかな〜)

バーリーは少々肩透かしをくらった気分である。

(もっと違う物のほうがよかったな)

ともあれ、こうして、うさぎの縫いぐるみは、バーリーのもとにやってきたのである。

この大型縫いぐるみは、後日、リインが『忠熊モモ』像の前で持つことになる。